

## まえがき

世界地図を広げてみると、日本から太平洋を隔ててすぐ隣には広大な領土を持つカナダがある。しかし、お隣の国でありながら、そのカナダの歴史や文化についてある程度にでも詳しく知る人は、いまの日本にいったいどのくらいいるだろうか？ ちょっとした観光情報で、美しいメイプル街道の写真やナイアガラの大観を目にした人は少なくはないだろうし、シルク・ド・ソレイユやレナード・コーエンのことを思い浮かべる向きもあるだろう。しかし、カナダ史を飾るような代表的な人物を何人かすぐ思い浮かべて、その名を挙げるができる人は、実はほとんどいないのではないだろうか？

この本は、その「お隣さん」のカナダの国の社会と文化の発展に多大な功績を残した（そして残し続けている）、ある勤勉で誠実な人物の生きざまを、どうしても伝えたいと強く願って書かれたものである。歴史上の何人かの真の偉人がそうであるように、その徹底した勤勉さと誠実さは、同時代の多くの人たちには、ずいぶんと風変わりな、時には異様なほどに映った。

今からおよそ 200 年前、ハドソン湾会社と北西会社という二つの毛皮会社に雇われて北米大陸全体のおよそ 5 分の 1 もの広大な未踏の地域を探索・測量し、今日でも通用する精緻な地図を作り続けた測量士がいた。極貧の母子家庭に育ち、若い頃の重度な骨折事故のため片足が不自由で、片目も見えなくなった男だった。貪欲な営利心とは無縁で、高度な知識と卓越した技能を駆使しながら、誠実と勤勉を重ねて前人未到の広大なフロンティアを測量・探索し、今はカナダの国宝となっている空白部の無い完璧な地図を作り続ける毎日を過ごした。しかし、峻険な酷寒のロッキーの探索で彼が成し遂げた

偉業の数々はほとんど剽窃され奪い取られて、彼は妻子とともに晩年を極貧のうちに過ごした。同時代の通念・常識をはるかに超えたその生き方や業績が真に世に評価されはじめたのは、彼の死後、半世紀以上も経ってからのことだった。

その人物、デイヴィッド・トンプソン（1770～1857）が踏破した「北米大陸の5分の1」は、およそ490万平方キロ、日本全土の総面積を13倍以上も上回る広大な領域で、彼は生涯に9万キロ（ないしは10万キロ）の距離を旅したのではないかと推計する研究者がある（延べ13万キロと見積もる研究書もある）。地球の赤道半径がおよそ6,400キロであるから、トンプソンはカヌーと馬と徒歩そして犬ゾリで地球を2周りほどしたということになる。伊能忠敬が10年ほどかけて歩いたのが3万3,700キロ、アメリカ合衆国史において特等級の英雄視を得て歴史に名を残しているルイスとクラークの探検隊は「たったの」1万3,000キロであるから、本来なら、この本で紹介するトンプソンこそが最も偉大な地図製作者として名を知られていて然るべきである。現代の日本のように道路や宿泊設備が整備されていたわけではなく、森また森の山岳地帯、夏は無数の蚊やブヨに悩まされ冬はマイナス40度を下回る日も続く酷寒の地で、巨大なクマやピューマ、オオカミなど獰猛な動物に襲われる危険もつきまとう。何より、カナダ先住民と白人開拓者との間には、アメリカ合衆国や中南米諸国におけるのと同様、凄惨な争いも稀ではない時代のことだった。むしろ、北米では歴史上ほかには例がないような規模で奴隷制度が拡大し、人種差別や人種間憎悪が日増しに根を拡げてゆく時代だった。それに第一、当時の辺境のフロンティアは強盗団まがいの荒くれや無法者がうじゃうじゃ跋扈する無秩序社会、高価な測量機器を持ち運んでいたりすれば、「いいカモ」に見られてつけ狙われるのがオチだった。

そんな状況のなかで、トンプソンは黙々と仕事をこなし、大方の同時代人たちのような身勝手な（大概是暴力的で冷酷な）やり方には同調せず、先住民には敬意を払って彼らの言語を習得し、生活のあり方や文化を理解して心を通わせ、そしてカナダの歴史に大きな足跡を残した。先住民たちは心からの親しみをこめて、彼のことをクー・クー・シント（Koo-Koo-Sint = star gazer : 天文博士、占星師、夢追い人）と呼んだ。

この注目すべき測量士、地図職人、そして夢想家は、読者の皆さんの心に忘れ難い強い鮮やかな印象を残して、今後のものの見方や生き方、考え方にもいろいろな示唆に富んだ大きな「地図」を示してくれることになるに違いない。